

映画『天国の口、終りの楽園』が描くメキシコの現在

経営学部
丸谷雄一郎

「天国の口、終りの楽園」は2001年度のメキシコ国内興行収入第1位の作品であり、ヴェネチア国際映画祭最優秀脚本賞（監督と弟との共同脚本）、最優秀新人賞（主演の2人が受賞）を獲得し、米国ゴールデン・グローブ賞外国語映画賞にもノミネートされた。監督はハリウッドで活躍するアルフォンソ・キュアロンである。

映画はメキシコ上流家庭の少年2人（フリオとテノッチ）と少年のテノッチの年上の従兄弟の妻ルイサの小旅行を描くロードムービーである。フリオとテノッチは親友同士で、高校卒業後大学までの夏休みに暇をもてあましていた。ある日、テノッチの親戚の結婚式があり、少年達は従兄弟の妻ルイサと出会う。彼女は夫の仕事の関係でメキシコへ渡ってきたばかりのスペイン生まれの美しい大人の女性であった。少年達はルイサを「天国の口、終りの楽園」という海岸に行く予定なので、一緒に行かないかと冗談で誘う。彼女はその時は断るが、夫の浮気の告白にショックを受け、少年達の冗談に乗る。彼らも後に引けなくなり、3人は旅に出る。

旅はメキシコシティから始まり、近郊の都市ブエブラ、貧しいが美しい街オアハカを通り、カリブ海に面する美しい海岸サンベルナベへと、山から海岸へ南下していくルートを進る。旅のシーンは車中での会話が多く、少年2人の奔放な性生活に関する会話が大半を占め、時折出てくるルイサの苦悩話とのギャップを生み出している。旅の途中で、少年達は互いが互いの彼女と性的関係を持ったことを暴露し、ルイサは旅先から夫に別れ



メキシコ田舎町の海岸

を告げ、二人の少年と性関係を持つ。旅は美しい海岸で終り、現地の猟師の案内で楽しいバカンスを過ごす。そして、少年達はルイサを残しメキシコシティに戻る。時が経過し、大学生になった二人は久々に街で出会い、お茶を飲みながら世間話をし、その会話の中で、ルイサが二人と別れた後癌で亡くなったことが明かされる。

映画はメキシコの現在を旅を通じた2つの階層の出会いという視点から描いている。旅に出発する前の冒頭部分はそれぞれの社会階層の存在を示すことに割かれている。大統領出席のパーティーが上層階層を示す象徴であり、このパーティーでの出会いにより3人の上層階層としての位置づけが明確化されている。少年の家で働く田舎出身のメイド達の存在、貧困地区のインフラの不備から起こる交通事故などが下層階層を示す象徴であり、メキシコシティにおける日常社会での下層階層の姿を明示している。

旅は上層階層の3人が車窓から下層社会を垣間見るという構図で進んでいく。車中はあくまでも、メキシコ上層階層の怠惰な日常を描いており、外の社会とは隔離されている。車内での会話は永延と少年特有の性への欲求に費やされており、社会問題とは無縁の階層であることを印象づける。車内とは対照的に車外の状況はナレーションで示され、ナレーションが下層階層の状況を語っている。それは貧困を訴えてメキシコシティへ行進する原住民達、少年の乳母の出身地である山間の田舎の

風景、地方にも存在する乞食で生計を立てる人々の姿、開発により追い出される先住民達の現状などである。

このように真面目な議論をすると、映画が小難しい内容のものに捉えられてしまうかもしれない。しかし、映画は決して難しい内容の作品ではなく、メキシコの雄大な大地が感じられる青春ロードムービーである。前号で取りあげた「アモレス・ペロス」においても感じたことだが、メキシコ人の困難な状況をありのまま捉え受け入れていくという国民性が非常によく現れている。メキシコは常に隣国米国の影響を強く受け、その米国を嫌悪しながらその影響下で生活を送っている。映画の中でも、米国を嫌悪する表現が繰り返し示されているが、両国の関係は米国コンプレックスを持っている日本の戦後世代を思い起こさせる。

また、映画は71年ぶりの政権交代を実現した大統領選挙を控えた緊迫感を示しているという点で貴重である。筆者はこの映画が撮影されたのと同時期にメキシコ南部からメキシコシティへの視察を行い、映画とは若干異なるルートであったが、映画が示すそうした緊迫感をひしひしと感じたのを覚えている。

最後にこの映画を見るとききの留意点を軽く述べておきたい。せりふの多くは刺激的であり、下品な表現が多く出てくる。スペイン語は英語ほどポピュラーでないだけに、字幕に頼るしかない。しかし、この字幕はメキシコにおけるスペイン語表現の雰囲気を出せていないのではという印象を受けた。メキシコ映画自体が少ない状況で高い翻訳水準を求めるのは酷であるが、表現があまりにも馬鹿正直すぎ、それほど深い意味で発した言葉ではないのに、字面を正直にとらえて逐語訳しすぎている。筆者も翻訳に携わった経験を持つが、その難しさを改めて感じた。これから映画を見られる皆様は性的表現に関しては少し差し引いて見てほしい。関西弁でも、時に非常にどぎつい表現が聞かれるが、関西の出身者が話すのを実際に聞くと、それほどどきつきを感じさせないといった経験を思い起こして欲しい。

エクセター文学紀行

経営学部

安藤 聡

エクセターはイングランド南西部のデヴォン州の州都であり、およそ2000年前に古代ローマ人が建設した英国最古の都市のひとつである。エクセターという地名の語源は「エクス川の畔の(ローマ人の)要塞都市」ということであり、名前の通り街はエクス川を見降ろす丘の上にある。有名な大聖堂はノルマン時代にノルマン様式で設計され14世紀末に完成したものであり、その周辺には今でも当時の町並が残っている。

エクセターにゆかりのある文人として最初に思いつくのはジョージ・ギッシング(1857~1903)である。彼は小説家としては同時代のH. G. ウェルズやアーノルド・ベネット程には評価されていないが、それでも最晩年の作である『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1903)は今なお日本でも文庫で版を重ねている。これは無名小説家ヘンリー・ライクロフト(もちろん架空の人物)が残した私記を「春」「夏」「秋」「冬」の4章に構成したという形を取っている。邦題は英語の原題 *The Private Papers of Henry Ryecroft* の直訳であるが、結果的に「私記」と「四季」を懸けていることになる。ロンドンの喧噪に疲れ人生のあらゆる競争に嫌気がさしたライクロフトは、エクセターの外れの田園に庵を構え静かな晩年を過ごす。彼の私記は周囲の自然の森羅万象への愛着と都会への嫌悪に満ちあふれている。ギッシングは実際1891年から93年までエクセターにいて、最初はプロスペクト・パーク24番地、次にセント・レナズ・テラス1番地に住んでいた。ライクロフトが人間社会に対して示す嫌悪には、ギッシング自身のそれが多分に反